

くすり博物館だより

NAITO MUSEUM OF PHARMACEUTICAL SCIENCE AND INDUSTRY

内藤記念くすり博物館 〒501-6195 岐阜県羽島郡川島町 Phone: 058689-2101 Fax: 058689-2197



企画展 くすり収納のかたち

～印籠から百味箆笥まで～ 1998年4月29日(水)～10月18日(日)

江戸時代は封建制度の成熟に伴う文化の普及と多様化の時代でした。急な事態に備え、また、旅先などで携帯用の薬入れは必需品となりました。また、この時代には本草学の研究が盛んになり、扱う生薬の種類も増加しました。百味箆笥や医師の薬箱も機能的にも工芸的にも優れたものが現れました。同時に、町人・職人文化が開花し、生活の向上が見られ、売薬の発展がうながされ、人々の生活にも薬が身近なものとなりました。

企画展では主に江戸時代から明治時代の携帯用薬入れ、医師の薬箱、百味箆笥、婚礼調の薬箆笥、行商用薬箱を紹介します。薬を分類、整理、保存のために、使いやすく、考え出された薬の入れものは、その形からも素材からも先人の知恵がしのべられます。

このたびは当館コレクションの薬の入れものを一堂に展示いたします。当時の人々と薬の結び付き、文化の歴史を垣間見ていただきたいと思います。皆様のご来館をお待ちいたしております。



＜携帯用の薬入れ＞

江戸時代に出版された「旅行用心集」(旅行案内書)は、道中所持したい薬を紹介しています。薬の携帯には印籠、きんちゃく、道中用薬入れなどを用いました。印籠は、蓋がはめ込み式になっていて、薬の変質を防ぐ構造となっています。実用性もさることながら、次第に意匠の凝ったものが作られ、装身具としての役割も果たすようになりました。



◀ (左上より時計周りに)

印籠 龍蒔絵 (江戸/6×6×2)

印籠 奔馬蒔絵 (江戸/8×6×1)

印籠 翁面神楽鈴扇蒔絵 (江戸/7×5×2)

きんちゃく (江戸/12×12×3)

道中用薬入れ (江戸/5.5×15×0.5)

有名売薬をセットしたミニチュア版。

道中用薬入れ (江戸/3×10×1)

<医家の薬箱>

医師が往診に持参する薬箱は、持ち運びに便利のように工夫されていました。江戸時代は生薬が中心であったため、たくさんの引出しのついたものや、重箱のように積み重ねられるものが中心でした。明治時代になり、洋薬の普及に伴い、薬瓶が入れられる薬箱が使われました。

▶ 往診用薬箱

(安政2年(1855)/24×35×32)

尾張藩御典医の藤波萬徳のもの。

引出しの中には生薬が収められています。



▲ 往診用薬箱(江戸～明治/18×31×29)

漢方医の大家、浅田宗伯が使用した薬箱。



◀ 往診用薬箱

(明治末期～大正

/18×26×25)

持ち運ぶ時のことを考えて、箱にぴったりと収まるように、四角の薬瓶が使われています。豊橋の浅井常三が使用した薬箱です。

<婚礼用薬箱>

婚礼用の衣装箆筒と共に薬箆筒や薬箱が作られました。

▶ 葵牡丹紋薬箱

(江戸/12×18×22)

黒の漆塗りに葵や牡丹紋の入った美しいものです。



◀ 御薬箆筒

(江戸/26×54×49)

<百味箆筒>

医家や、薬屋では、多種類の生薬を整理し、保管するためにたくさんの引出しのついた薬箆筒を使いました。多種多様に薬が収められるので、百味箆筒とも呼ばれました。



▲ 韓国の百味箆筒(25×55×87)

<行商用薬箱>

薬売りは、街頭で自分の売る品の宣伝をするために、行商姿に工夫を凝らしていました。

▶定斎薬箱

(明治初期/40×30×95)

夏の諸病に効果がある薬に、「定斎薬」あるいは「是斎薬」がありました。盛夏の候になると、大きな箆笥のような薬箱を天秤棒で振分けて担ぎ、江戸時代から昭和初期まで、東京の夏の風物詩として良く知られていました。



▲菊の露薬箱(江戸/14×35×42)
「おしろいのよくのる顔の薬」「虫菌の薬」など書いてあります。
(企画展担当 学芸員 伊藤恭子)

薬草園から

薬用植物園の熱帯有用植物温室の紹介Ⅱ

前号では、カカオ、サポジラ、チョウジ、カユプティ、アカキナノキの5種の植物を紹介しました。今回も、一般の植物園の温室ではお目にかかれないような、珍しい植物を紹介します。

<あれ、こんな植物なの? : バニラ>



生育旺盛なラン科常緑のツル植物で、1~2月に淡緑黄色の花が咲きます。早朝に開花し、夕方にはしぼむ1日花で、開花時に花粉付け処理をすると結実し、3ヶ月ほどで長さが15cm前後の果実に伸長します。小指ほどの太さで、形が豆の莢に似ているので、バニラビーンと呼ばれます。果実が成熟するには開花から約10ヶ月を要します。この期間中、茎葉と同じ緑色で全く香りもなく、極めて目につき難い状態なので、うっかり見過ごしてしまう見学者も少なくありません。黄化成熟し始めた果実を採り、発酵処理をすると甘い香りをするようになります。チョコレートやアイスクリームの香り付けに利用します。

このほかに、香木として古来より有名なビャクダン(白檀)やニューコウ(乳香)、コショウやニクズク(ナツメグ)などの香辛料もあり、植物好きの方には思いがけない驚きや発見があるかもしれません。

(くすり博物館附属薬用植物園 白井英夫)

<へー、そうなの! : イナゴマメ>

地中海沿岸原産のマメ科の常緑樹です。アラビア語でキラットと呼ばれ、この豆の種子の重さが均一であるため、昔は金細工師のはかりの分銅に用いられ、カラットという単位になりました。当植物園温室のイナゴマメは、12月頃より枝先に開花し、サヤエンドウを大きくしたような莢をつけ始めました。成熟期の6月頃には、重量が均一の種子がたくさん採取できることでしょうか。果肉には、たんぱく質やビタミン類を含んだ糖分が豊富に含まれており、菓子や加工食品などに使用されます。



TOPIX

<新収蔵資料紹介>

▼大同薬室文庫 寄贈

漢方の大家、故中野康章先生のコレクション『大同薬室文庫』を中野康夫様より寄贈していただきました。ここには、医学・薬学の和装本を中心とした約20,000件の図書が納められています。現在、整理にとりかかっており、今後の研究に役立てたいと思います。



▲神農画 寄贈

数々の美術展で受賞されている石川敏雄様よりご本人が描かれた神農画を寄贈していただきました。

▶錦絵広告 寄贈

岩谷成彦様より、錦絵広告等38点の資料を寄贈していただきました。新収蔵コーナーで、その一部を紹介しています。



▶目薬資料 寄贈

井上博次様より寄贈していただきました。京都・井上目洗薬の主原料となる、炉甘石です。これを焼成して使用しました。この他に、焼成壺などを寄贈していただきました。



<出版物のお知らせ>

『くすり博物館収蔵資料集③ くすり入れ』

『薬用植物に親しむためのハンドブック2』



今回の企画展にあわせて『くすり博物館収蔵資料集③くすり入れ』を出版いたしました。印籠・薬箱・百味筆筒などの解説と、約110点の図版を収録した、シリーズ第3集です。

(1冊 2,000円)



この度、『薬用植物に親しむためのハンドブック2』を出版いたしました。この本には、当薬用植物園や近郊で見られる薬草、165点が掲載されています。当博物館主催の植物画講座の受講生と講師 逸見誠三郎の手による植物画を採用しました。なお、3月7日より4月5日まで、植物画講座作品展を開催いたしました。『薬用植物に親しむためのハンドブック1』も好評発売中です。併せてご利用ください。

(1冊 600円)

購入をご希望される場合は、住所・氏名・電話番号・希望の商品名と部数をご記入の上、はがきまたはFAXでお申し込みください。(郵送料はお客様の負担となります)

<薬草説明会のお知らせ>

薬草園では、4～11月までの第1日曜日(10:00～10:45)に“今月の薬草説明会”を開催しています。その月に、花や実をつけている薬草を中心に紹介します。事前の申し込みは不要ですので、10時までにくすり博物館の受付におこしください。

<資料寄贈者ご芳名>

多くの方より資料・図書をご寄贈いただきました。厚く御礼申し上げます。
太田康彦 石川敏雄 井出研 井上博次 岩谷成彦 笠原英城 片桐平智
佐藤允夫 佐藤汎 鈴木利 中野康夫 浜中修 正橋剛二 宮崎惇 (敬称略五十音順)

～お詫び～

くすり博物館だより第38号にて間違いがございました。深くお詫び申し上げます。下記のように訂正させていただきます。

(誤)いす。→(正)います。(P3) 和菓→和薬 (P5右下)

三星堂製薬→三星堂 (P8左上)

館長 三宅康夫 学芸員 稲垣裕美 朝倉加代(編集担当) 学芸員・司書 野尻佳与子 伊藤恭子 庶務 森田麻起子
説明員 小島敦子 薬用植物園 白井英夫 栗本省三 松尾三雄 顧問 青木允夫 七ヶ井 逸見誠三郎
内藤記念くすり博物館 開館/9:00～16:00 休館/月曜日・年末年始(12/28～1/8)